心理学の新しいかたち【方法への意識】

下山晴彦・子安増生（編著）
遠藤利彦・吉田寿夫・鹿毛雅治・佐藤達哉（著）/2002 誠信書房

大井 直子 OOI, Naoko
● 国際基督教大学
International Christian University

心理学の方法論に関する議論は，様々な時代背景のもとに有力な理論の台頭にともなってなされてきた．現代の心理学は，アメリカのカウンセリング・ブームによって学会の規模も大きくなってきている．近年日本の心理学会では，日本心理臨床学会が母胎となった財団法人が文部科学省の認可を受けて「臨床心理士」資格認定制度をつくり，臨床心理学のみが脚光を浴びて色々な問題が起こっている．

本書の編者でもある臨床心理学者の下山氏は，「臨床心理学の急激な拡大に対して，他の領域の心理学が反発し，対抗するといった対立構造が形成されてしまいました．臨床心理学と他の心理学の分裂を孕む由々しき事態となっており，心理学全体の発展という点では危機的状況となっています.」また「日本の臨床心理学は，いまだに学派ごとの心理療法をモデルとする発想から抜け出しておらず，セクショナリズムが色濃く残っています.」という認識から，日本教育心理学会でシンポジウムを企画し，それが契機となって本書が生まれた．

第1章「心理学の新しいかたちを探る」を担当した下山氏は，現在の心理学の混乱の要因は方法論の対立にあるとし，対立を次のように表現している．科学としての心理学 VS 実践としての心理学，アカデミック心理学 VS プロフェッショナル心理学，論理実証主義 VS 社会構成主義，基礎心理学 VS 臨床心理学，中心 VS 周辺という対立図式があり，VS 前者はすべて対応しており，VS 後者はすべて対応している．

アカデミック心理学である基礎心理学は自然科学モデルを目指してきた．それは量的調査法をとり，数量化や統計的方法を用いることで自然科学の原理である普遍性，客観性や論理性を維持することを重視してきた．この方法は，心そのものを研究対象にすることから離れる．一方，プロフェッショナル心理学である臨床心理学は質的調査法をとり，人が生きている状況を記述している．脳科学・神経科学などが発展し，心の領域に関わってきた今日，基礎心理学が「擬似科学」にとどまっていることが露見した．以上のように下山氏は現在の心理学をとらえ，次のような提言をしている．「臨床心理学のような実践型の心理学を含めて心理学の統合的な枠組みを考える場合には，実践性と科学性を同等に置き，両者が有機的に連携できる枠組みが構想されるべきです.」「自然科学に準じていない研究方法を応用としてではなく，心理学の基本的な方法として位置づけ，多元的な視点から心理学の再構成をしていくことが，日本の心理学が21世紀のポストモダンの時代を生き抜く出発点になると考えます.」

下山氏の提出した対立軸は「新しい」ものではなく，フッサール以来の対立である「現象学的方法 VS 科学的方法」の系譜と思われる．また，基礎心理学＝量的研究法＝仮説検証 VS 臨床心理学＝質的研究法＝仮説生成という図式は現実的ではなく，無理に二項対立化させていると思われる．すでに基礎

心理学の領域で質的研究はなされているし，臨床心理学の領域で量的研究はなされている．さらに質的研究で仮説検証型の研究も散見される．しかしながら，心理学の科学性と実践性を調和させたいという下山氏の熱いメッセージが伝わってくる章である．

第2章「問いを発することと確かめること」を担当した発達心理学者の遠藤氏は，仮説演繹と仮説検証を重んじる研究スタンスをそのまま心理学に持ち込むことの本質的な誤謬と限界と同時に，それを完全に遂行し得ないことに問題があると述べている．

そして心理学における自然科学的アプローチの限界を，科学哲学者 Hanson（1958）の「事実の理論負荷性」（解釈抜きの純然たる客観的事実など存在せず，データ自体が本質的にある特定の理論に依存して成り立っている）によって指摘し，「データに含まれる自らの憶測や予断や解釈というものを積極的に自覚し開示した上で，そのデータの真の意味を追究していくという姿勢を持ってしかるべきなのかもしれません.」と述べている．この科学哲学の視点は，国際基督教大学では村上陽一郎教授の「科学哲学」で詳しく勉強できるので，心理学の専攻生も是非履修してほしいものである．

また遠藤氏は，「質的研究法とは可能な限りデータ・リダクションを行わずに収集したしたままの質的データから帰納的に仮説や理論を発想・生成し，研究者よりは研究対象自身の視点から，事象や経験，意味をその背景・文脈および時間的流れなどから切り離すことなく理解しようとする研究のあり方.」と述べている．そして日本のほとんどの学会誌が紙数に厳しい上限を設けていると批判をしている．しかし「可能な限りデータ・リダクションを行わず」とあるが，研究者がデータを記述するとき，すでにそこには「研究者の視点」が入り込むのではないだろうか，すでに「ある」リダクションが行われているのではないだろうか．

第3章の「研究法に関する基本姿勢を問う」を担当した社会心理学者の吉田氏は心理学専攻生が最も頻繁に使用する心理統計書の著者でもある．心理学で取り扱うほとんどが構成概念なので，操作や測定の方法に完全という状態はあり得ないし，どのような心理現象にも非常に多くの変数が複雑に絡み合っている，という認識の下に指摘と提言をおこなっている．「心理学研究法Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」を10年以上お手伝いしている筆者にとっても反省の契機となったメッセージである．心理学専攻生に是非とも読んでほしいので，項目と需要事項だけでもあげておきたい．

・仮説検証研究の横行，検証に値すると思える仮説の吟味をしていない．・仮説を否定するデータを追究・提示することの軽視．・研究法の固定化・マニュアル化．・統計的検定の無批判な適用：有意水準．・統計の絶対視．・「統計モデル先にありき」の姿勢．統計モデルが，自分が検討しようとしている心理的事象の現実にフィットしていると見なせるか．・一般化可能性についての誤解．追試に対する狭い考え方の存在，追試の内容をもっと広く柔軟にとらえる．限定条件を明確にしておく．・独立変数の操作の単一性の維持への固執．・一人ひとりについてもっとていねいに吟味しよう＆データの収集過程にもっと労力をかけよう．・統計の力の過大視・統計への過度の依存，重回帰分析，パス解析，共分散構造分析：ある特定の因果関係の存在が立証できるか否かは，データの収集法に依存しているはず．・個人内変動を重視しよう．・妥当性に関して重大な問題があると考えられる質問紙法の横行．・被験者の内省能力への過度な依存．・反応バイアスの軽視．・妥当性に関する吟味不足・類似した構成概念および尺度の乱立．・実験計画法の基本的目的についての認識不足・無作為化への安住．・剰余変数を積極的に統制しよう．

第4章「フィールドに関わる「研究者／私」」を担当している教育心理学者の鹿毛氏は，心理学者がフィールドに関わる二つの動機として，「学究動機」と「実践動機」をあげている．氏自らの体験を通して「実践心理学」の可能性を模索し，「学究動機」と「実践動機」をともに抱いてフィールドに関わる研究方法として，Lewin, K. (1946) が提唱したアクションリサーチに注目している．

アクションリサーチは「実践についての研究」と「実践を通しての研究」の二側面が統合されたアプローチで，アカデミアとフィールドの境界がなくなり，研究活動と実践活動との二項対立が解消に向か

うことによって，「研究」の意味，「理論」の意味，そして「研究者」の意味も変わってくる，と述べている．

このアクションリサーチはすでに 1960 年代に国際基督教大学で行われた「価値観研究」で採られた研究方法である．

第 5 章「モードⅡ・現場心理学・質的研究」の担当はフィールドワークの旗手である社会心理学者の佐藤氏で，方法論の対立をモードⅠ VS モードⅡ，学範内好奇心駆動型 VS 社会関心駆動型，学際 VS 学融，普遍 VS 事例，一般 VS 専門，量的 VS 質的，理論志向 VS 課題解決志向，トップダウン（概念先行型） VS ボトムアップ（概念創発型）とした．VS 前者はすべて対応しており，VS 後者はすべて対応している．これらの対立はモード論 (Gibbons, M. 1994) によって克服できると述べている．「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」が大切であり，「恥知らずの折衷主義」を推奨している．

第 6 章の「心理学研究における二項対立を越えて」の担当は発達心理学者の子安氏で，第 1 章から第 5 章までを概観した後，二項対立を越えるということを考えるうえで重要な本として「教育の文化」(Bruner,1996) をあげ，その中の「ナラティブ」と「間主観性(相互主観性)」が重要であると述べている．いろいろな手続きを踏まえて記録し整理した「事実」の提示し，そのうえで，事実の提示だけでは限界があることがらを物語化するという研究スタンスを推奨している．また氏が長年研究している「心の理論」と間主観性の共通点を述べ，研究の遂行には「心の理論」が必要であると述べている．

質的研究に対して，私自身が常々考えていたことを子安氏が述べてくれているのでそれを引用したいと思う．「質的研究の重要性を主張する人達が，数量化というデータ・リダクションを避けようとするのに，言語化された「生」のデータはデータ・リダクションを行っていないと考えるのであれば，それは自覚不足と言わざるを得ません．記述であれ，物語化であれ，現象を観察し記録し伝達するという過程で，必ずデータ，リダクションが行われていると考えなければなりません．生身の現実は，その時その場でしかありえず，その生身の現実を想起し，人に語るとき，そこにはデータ・リダクションが生じているのです．」

本書は 6 人の心理学者が，それぞれの研究の立場から心理学の方法論について述べているものであり，「心理学の新しいかたち」とはいえないかもしれない．しかしながら，自分自身の研究の立場や等閑にしてきた研究方法を明確にするうえに大きな刺激となる本である．